

柳之種
用
捨
心
お

人

15
1435
3止



門 45
號 7435
卷 3

尚古堂

用捨箱下之卷

〔一〕 ぐりなま 芋の山

柳亭種彦編

今いまのそと翻そと語ごなる事ことをぐりなまといひてのしらえ
難たがきより出いてい言こと前まへ後のちから義ぎをるさる譬たと言ことへいひらるが轉てんと彼のの
翻ひら語ごとるやうとわりに排はい諧げ破ぱ邪じゃ顯けん正せい
延えん宝ほう七しち年ねん印いん木ぼく 小こ曰い「清せい水すいのしを流れ
松しょう月げつ庵あん隨ずい流りゅう著しやく 林りん祇ぎ園えんといふを略りやく目め是ぜを
清せい水すいといふを作さく意いもるべし祇ぎ園えんといふを略りやく目め是ぜを
連れん歌かといふ芋のやまといふを大おほきふきらふ能諧げといふをといふを同どうし
芋いものこといひて義ぎをるさるといふを同どうし

葛藤集 万治三

住吉あて 鈴のぐりなまとらそ水の月 立圃 小町踊

早稲田大学図書館
第29.4.1 史
蔵書

前の二莊を夫の初申丹後の國錢燒地藏の事だとい。後のかろやゆ信濃の
 園親子地蔵の事をいふ説經の微意を存しるふ似たり。借やまかろやの
 二本板元喜右衛門とあるは江戸通油町鶴屋の祖なり。浄瑠璃屋の号寛永八
 年よりあるを見れば是より約十種の彫本ありし事必せり。また初て刊行
 せし元和年間も知らるべき。あつ摸しる冊子二種も昔ある本とある
 へ物の廉悪るるめて丹緑青を筆まきせし彩色も多し點ト七最古雅なり。
 七色賣の條より引る小栗判官も必當時の彫本あるべけれど未見

三 奥浄瑠璃

江戸馬喰町の繪草紙屋永壽堂西村屋 小阿弥陀の胸割。きりかひ曾我
 熊谷の類の古浄瑠璃六七種元禄宝永の頃再彫しる摺板傳なりあり
 近く文化中まで春と母小製本しと奥州へのもせり故ふ永壽堂より仙臺

用捨箱 下五

浄瑠璃とあるは又正本といふ。奥州のみ今も是等の浄瑠璃をかくる者あり
 三線のみく扇めて拍子をさるのとなりとも彼地へも賣らるる此故なり
 桜るふ俳諧の句も見えたる奥浄瑠璃といふ是なり

俳枕 寛文年間撰

陸奥 奥浄瑠璃緒絶の橋や古扇 調和

軒端の獨活 延宝八年刻 松意撰

琴瑟律疎ふ扇奴 調ふ 昨今非
 奥浄瑠璃頻遊のるまり居るる 全

其袋 元禄三年刻 嵐雪撰

とちのく乃に弦まけが扇る 鋤立

俳枕 三線あるを借絶といふやゆせ。古扇めて古風を存しるはのり

あべ 軒端の獨活の扇の調あつひつけ 其袋の淨溜璃とらをそとそれとまつ

まる利ま口こるり。かれが彼地の淨溜璃の廿より二線のるるやいなるべ

再云此摺板の傳り阿孫陀の胸割の東海道名所記のもも元元赤鳥の卷の

の六字南を右のの作るると記されり其是は淋の少時のかきの文の古雅の

る標題の異やるるあて寛永前の淨溜璃る事の明るれも永壽堂の

本小奥書るけれが誰人がからて江戸の摺板の残り考へ得ざりしが不意の

天満八右まの右ある本を得て彼摺板の傳り由縁を知まり

又云此天満八右まの説經淨溜璃の右まて芝居の堺町のあり江戸名所記の寛文二年

の画の大大薩摩の芝居の並び野良三座説の貞享元年印本の載る堺町の圖の出來傳の

と中村善五の二軒の之之居のままれて北側のり元禄曾我物語の十五の十文字の

さままが景清の門破り天満八太夫がからる道心を並べのいとをままを方治の

用捨箱 下六

頃より宝永中までおこるをれいなるべ

風俗陀羅尼 宝曆十年刻 尺龍撰

冠 浮世のまま小天満の一一 甲州長沢●組

彼かからりし淨溜璃の節節宝曆の頃の廢れ僅小残り事此冠冠のかのシ若り

此天満節の奥州の近くまで傳える事の由の何る事天満八右まの事のこの事紙の

四 蚊帳の香袋を掛

誰袖の糸のひひ如くはいの香囊の類かとるをれて白袋を蚊帳の掛し夏まり

鹿驚集 明曆三年印本

くく花の白袋蚊帳草 撰者 春清

信親下句 明曆元年刻

前句 人知る糸の白袋蚊帳の夏の風

附々 釣一蚊帳の内外々々き夜

懐子 万治三年刻

床近之目小掛物を心めて
白袋と蚊屋のまじり

撰者 重頼

是等の句を多く
ありて止

是ハ高貴人の臥ふまうけるべけれど今もさる事あるを「甘之遊女いたるを浮世
又かひ小赤鳥の巻」小大嶋求馬の説るを「甘之遊女いたるを浮世
狂ひとひらり傾疎の宅前柳を二本植て横身を由ひ布簾をけそれ
小遊女の名を書て下ふ二角ある袋を自分の細工めて付一り是を浮世
袋といひるる「さるなり」とり小事を載られ是白袋なるべ。凡ふあつて
自然香を散さん料るれが蚊帳へ掛るも同事のやうふかゆる。甘之遊女と
さるへ遊女へ更なり格子をとりてそれ小次者も伽羅羅衣小留ぶるのあき

用捨箱 下上

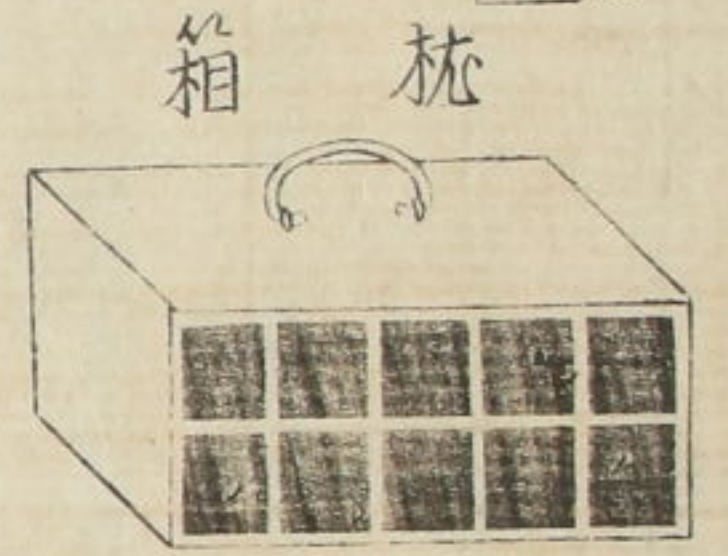
さるるのへか余情も「さるなり」とりあつてらん。それが彼誰袖の如く後あ香類
をのれど布簾の縫留とあつてなるべ

【五】枕簟草笥

何の器物も何れ其形のと専をるれ旦夕目小列れ古くより何世物の
やうと思はるる世の常なり。床枕の如く近き製作るべけれど若き人の名どあ
も知らむ唯。枕との物と思ふもあつたり。西川祐信の画「正徳雛形」の枕
の模様小形の似る何れも今の如く溢との物をつけたるを。備此枕る
あの中人以下皆箱枕るじり。客のまうけるんども枕五つ宛を重箱箱ふ
のれ方何れ。是を枕簟草笥とのり。古き調度を商舗ありふれてあり。小口を
黒漆にて塗紋所を金粉にて時給あると何れ下賤の者のと相枕を用ひし
もの何れ今も旅簾屋茶屋やうのころあ此枕簟草笥のある鉄不知

元禄六年印本
京大坂茶屋雀

一名
諸分調方記
不載方圖



此茶屋雀の作りたる十の枕と名なき草紙
を名ど今藝州宮澤の遊女枕二と相おられ
銀めてひきさぐるやうな作りて來た形小
似たりとぞ。

塵取 延宝七年刻 常矩撰

大形の恨との殺も十中一
東ぬ夜重ねてうき枕箱 風扇

常陸帶 元禄四年刻 見水撰

春雨小九ツ ありあけ 枕のなま 林鳩
誦る人もうくおのれ一人藤言じ

蓬真千鳥 元禄十一年 桃隣撰

木枕や十人までを冬 琴風

用捨箱 下八

四五百森 元禄七年刻

櫛子と忽や随分の用 示因
月十の枕の十耐小 全

而形集 平砂句集

本枕を八卦に配れ 復座友

江戸筏 享保元年刻

十人並を枕りやー き 青娥

とよ吟あつち思ふ小享保の頃いよと塚枕をるるれ箱枕の廢るやあらん
又曰 河念佛 元禄十
四年刻 小 枕をんまを次きむる伊勢骨柳小何らうちのれとあるの縁の
用意して枕邊くわく筆筒の事なり。自邊くわく紙を筆筒といふ同

藤井山二郎ハ此垣下つれく草小見え如く寛文中。人小愛られかき舞の上も梅がつまとの狂言小名あり。江戸の流行物を集めて短歌浪人様を退治して。八人座頭の。見世物小。仁王助が。大力。見ふる人。布引の。藤井山二郎。女が。志をぬく。の盛。中略代も。西鶴一代男。五の巻。京師靈山の事。湯虎とる。梅まふ。西鶴一代男。五の巻。京師靈山の事。を公條小。藤井山二郎の名あり。是寛文元年の頃の事を記して。又寛文二年刻江戸かき少年の評書。剱野老。小山二郎と不載。され。當時。寛文の京への不。万治年間の印本京のかきの評書。野良虫。中山の事。ふん。如く江戸より。し。京の産。借。此山二郎。

用書箱下十二

善く延宝の初没。古今役者物語。延宝六。流れも清き玉川の。せんのおもう。主膳と。野良。水。又。藤井の。消。梅が。狂言の。画。又。茶三幅。延宝九。江戸町二目大黒屋。初。遊女。と評。面。され。中略。人の曰。藤井山二郎。独。藤井。み。ける。す。又。西鶴大鑑。貞享。江戸の事。野良の花。姿。一冊と。居。形。事。重寶。中。と。や。意。根。の。藤井山二郎。中略。恨。の。浮世。の。さら。花。の。村。雨。桂。光。の。雲。霧。十。九。の。名。残。り。平。生。の。顔。色。の。病。中。の。衰。へ。蒼。解。眠。多。如。一。あ。れ。が。没。し。て。後。ま。も。首。の。あ。や。か。す。る。べ。

虚栗

天和三年
其角撰

小袖着せて傍白へ梅がつま 其角

是山三舟が追善の句ありあらずや。此集より十八年後芭蕉公羽十回

忌の刻同其角が發起ある 三上吟 元禄十三年

日向て笑ふ盛物の裏 其角

顔見世も源井時代のるはさき 序令

とりふ附合あり不照合て如く思ふる別な故事ありや不知

八 八人座頭

前小録一短歌八人座頭の見世物とあるは今八人藝ある也。西鶴作

一代女貞享小万治年中駿河岡の庵川のあり不酒樂と八人座頭江戸ふらふら

屋敷方のるさふ紙帳のうらふ入て唱物八人の役を獨して向をあまふらと

用捨箱 下十三

の事足えより八人座頭と六彼酒樂が事なるべし。此業中絶あるや。其後
名あり者少む。近く天明末の頃川橋歌命其弟子歌遊。寛政ふらふら
師小満よりて流行。文化の初彼輩うち集ひ此業の祖よりて長流
聖理とあり者の百年已心を吊ひし事あり。されば聖理の宝永の頃と盛んふ
経る者あるべしと考へ合とべき草紙を未見漢土の是は似る支五雜
組ありと先進の隨筆ふらふら

九 錢獨樂流行

元禄のすゑ宝永のころめの頃何人飲錢獨樂をこのころ一時流行せし事

何ぞ俳諧の点者踏水 京都住 白梅園 著者あり 新玉櫛寄 宝永六年印本 二の巻小香山

梅之助といふ人あり常小獨樂を翫びてたのしとせり何る時文の錢飲

六錢七錢乃至十錢と敷系ぎ貫きこまふ筆の軸をりつて別心本と

通し糸を巻て回轉の機をまうけひこまふ是誠愛しけ浅独糸の
ふ記を書て曰。獨樂よままふ汝時を得たり一ころ楊弓の枝小催促
せらま行成の紙袍をまて射とれ座小連りし入珍らしき事小
ゆいふりし今ハ綾錦金襴の衣服さうびやうふ。ま紅紫の組糸を
帯と一程々緋羅紗の蒲團は象牙玳瑁の杖をつき一曲の舞小錦ハ
袂を翻せ満座頤頤解てよろこび。浴中の男女貴賤を厭む汝が舞振
の久しかりん事を願ひ汝が藝の他ハ勝ん事を思ふと妓女を仕立るら
如し五節の舞寛堂衣の曲まがき。永代橋。何れの曲小長トハ海物も
賞羨せらまそ時代時澹の相の中ハ豊小眠り。青銅鳥目の切名を
削て助六といひ。文七と名ふ。柏崎と呼ぶ。松風と号し。さかむと高
位ハ海なる料足といひ。沙阿と名づけしハ襟さ名るれど今汝が花やう

用捨箱下上四

ある威勢ハ誰のりて俗性をのり者る云云以上摘用 非全文と記してすある
又六ハ齋の儲さうて花二寸」といふ句ヲ載たり。又諸分床軍談年号ヲケ 正徳の頃
五の巻大坂新町の事をのり糸一勘七お鼓拵紙入よりとと錢をのり
金入の煙草入こたこのれととちて早束錢を車ととら久奥座おくらへ持てまあり
て赤れまのき。此車ハ京で錢を江でハ錢車といふまご此所ハ大坂と
今がとめてぢや女おんなさま方ハかう鍼をわけてかう廻してお目小かきや
此舞うちハ味線るあじとせん。三遍引る。淨瑠璃る道行みちゆきツかする。あは
ううふ舞てありやごふ。お慰とやとごらじませ」といふと何れハ小児の歌弄
のまのあま酒席あさせきも由持とて與とせしるべし。儲玉たくらぎ拵か小記ハ獨
樂の名と考ふ文七。文六ハ少えし如く。文綾の粒る。助六ハ一中節の
淨瑠璃じやうるり。蟬せみの聲がう。小万屋助六あり是る。柏崎。松風の誰とも知る

謡曲有り。其曲致うと云間。彼助六の道行を語の程。舞やまざり一賞ふかく
をつけしやや何らん。とかき。永代橋ふ長トと何るとかき。譯ハ既ハ床
軍談ハ何り。永代橋ハ松の葉元禄十
六年刻この巻不載。トトゆ。願いもいとかけ
ほくもとありて。永代橋ふぞ恙ぬふとゆふとる。端歌の名あり。是又それを
くく程るぐく舞を巻て長トと何りいさるる。再按むる近く若緑勢
曾我享保三
年正月ふ二代目市川團十郎が外良賣の詞ハ「まづ一粒り何らう
どらうトませの口の中の涼一さがかくづる物。さるふよつて舌のちんちん事か
綾獨樂が裸足で遊る」とゆ事あれ。享保の頃までハまご説ぶ者も何れ也
因ハ云路水が文ハ錢の行成紙ハつまれ一事を記し發語ハ「こととゆひハ天和
中こさう一する銀一時隨筆天和三
年著」近き頃京洛浪速の老少楊弓を翫ハ云一錢ヲ
餓鬼二地三山。五ヲ於洲賀。十ヲ草冠。百ヲ牛とと」とゆ見えと
用捨箱 下十五

十 俳諧の句を狂歌と誤る

亡友曳尾庵。文禄慶長頃の古画なりとて色紙形のちひさきハ花鳥人物
の類をふりき。トハ宗鑑が犬筑波集の附合の句をわし書ハ云「後
せり。是ハ屏風障不るんハ押ハ料ハ當時おこるハ多ハ了ハ犬筑波の句を
女ハ漸高ハ物なりとぞ。儲ハ彼ハしハ女ハあハるハ心ハきハ者ハ狂歌ハあハレ
思ハ違ハへハ写ハしハ口ハもハいハ傳ハへハとハ何ハキハ事ハ何ハ雄長光
元和年 小ハ大般若ハとハ女ハのハきハとハ何ハたハきハやハとハんハのハひハとハ」と何ハハ
間撰 小ハ大般若ハとハ女ハのハきハとハ何ハたハきハやハとハんハのハひハとハ」と何ハハ
狂歌ハ何ハとハ彼ハ犬筑波の附合なり。又扇の草紙」とゆ何ハ殘詞を見
刊行の年号ハ知ハされハる。五色の紙ハ摺角の花本一名光悦本ととるハ
物ハ狂歌集と同項の書ハる。次ハ摸と如ク扇の形ハ画ハり。上ハ誰ハも
如ハ古歌ハ交ハて狂歌を題ハと。是ハハ犬筑波の句ハ何ハ



用捨箱 下十六

前の。こき出さ船。月かす花の小枝の二種の。彼大菟波集の附合の句あり。
後の大長刀。武藏野の二歌ハ大菟波中見えざれど前の例ふるへ是又古き
倣諧の附合るべし。大長刀のさぶとりの存んとのかたふ中。強敵。山賊るんどの
例とあれし事との存ん。嘗の細腰と狂言の附するやうふあゆむ。梅むらふ。文安五
年撰
古菟波集
散花を追かけてゆくゆづり
倣諧の効ふ
大長刀ふにぐる嘗

とあるハ此花ふとちらすとのかた集より前ありて。それを取らるる事
必せりされバ狂歌もせよ。予が考への如く倣諧の附合もせよ大長刀の方古く
より人口ありしなり。武藏野の方古き物の本あり見えざる歟。是も草より出て草ハ
こそのが糸の中。虫飲細流など。附べき。案外る月と出して狭き句を廣く
とらるるべし。倣諧の効ふ
奥書行年 前 中 小 小 橋 の 歩 履 ありてとらる
七十五宗鑑

用捨箱 下十八

附 倣諧の効ふ
「あまのこ備前國の物語」とありて宗鑑の自注ハ「けり新字のくも
ハ人ありても此類くくかき」と見えされハ昔の倣諧の糸の附句ハ同字
あるをもさまであり嫌ざりしるべし。武藏野の歌ハ月の入き。草ふこそわれ。耳は
同字あり。附合の句とせハ免まべき例茲あり歌をハ何はべく。元和三年
徳永種久との人の紀行「江戸くさり」ハ「米あふまけても賣や六合ふけ病
とだて誰う川流。弓もど目れが。武藏野の月のるべきふも草より出て
草ふこそわれと古き歌も詠れり」とあるハ扇のさうと合せたれハやく
慶長の頃古歌ありと思ひ何やまじあるべし

十一 下帯を手綱とらふ

今の下帯と手綱とのひし事。考を記して後經平子の「春湊浪語」とんゆハ
其説最細くされハ破捨んと思ひハ近く。と音便ハひし事など

俗書小見えたるの載られ福が其かごとくを記さべし經平子義貞記を引れり
今傳る寛永の印本あり「鑑可着次方の事。一番浴衣二番小袖」とあり其
後の刻本も如く記して細と云。是の昔書写し者一番の鑑とあり
が解せざる故私に浴衣と改りりあるべし鴉鷺台戰
用い順を記しぬひ一一番の細とあり二番以下義貞記不違ふ事あけき
古き義貞記あり細とあり事必せり。此の春湊浪語ふええり書の略つ

守武千句 天文九年

町へりびのちりめく見ゆ
細をわかど袴のころびて

▲も下帯をあむるとかくといふ古今著述集ふたえり 又醒睡笑廣本 元和五の巻
宗長法師のるかふまのり曉りそきかると下帯をとま

泪捨箱 下十九

かうれー我持せそかりられ流てつるす
思ひきやかこもよふかの濱風小浪よりる死名のたんとま

同書六の巻の軽口話おも又多細の事あり宗長の歌といふかづつるれど元和甲
まの此名のゆり証とまべし又近く正章千句 正章の貞室初名

相撲こりぐあれり中
かへさうかここのたんなあけて

正保四年の吟る是より二十年して寛文の半一雪といふ者茶拍竹と題する
草紙を著し正章を批判しけむ前の相撲附と雑と貞と怒と蠲と
の書を作す是ふと下帯の事なりそれを附とといふ。とありて
思ふ正保の頃まで音便てるといひ寛文の頃その名も人知らざるや
あり。因ふ云見聞集 慶長一の巻下帯古ふかざる事の條あり昔長

よき順ちての帯の麻布杯を四五尺程ふきり中より二つ割。ワッ
方とハ腰廻へ糸めて結びくりが當世の下帯の如きなり中略今世豊
ち皆人秘をまぶす杯の和る物物を腰へ引廻し片結びふるせり」との
事ゆへよき順と天正の半とさしてゆれりるもかれが今の下帯の製
慶長中を始るべき

十二 別當との俗語

神宮寺の類と徳別當と稱する誰れも知る如くその神と守傳との義あり
それと轉て俗語の別當の我も小ゆつりひがゆ物と喰をわう童の
昔神さんど小果子やうの物を備へそれ取あうして喰と別當とよると
是なり。夏の夕は飛來る青色の虫を夕顔別當といふも夕顔の花はるる
ゆり秋の顔ふるも故の名なり。北越を蝶をさるるうとゆ所ある

用捨箱 下二十

近年發販して世ふとある雪譜 小見えり梅まらふ 伊丹發々合 享保九年刻

才齋翁の判の詞。蕎麥の花の蜂の酒。とら諺あり是對見れば蝶がゆい
ちふ花の蜜を吸さまの酒をのむ似る故酒別當と名づけりやふおも
える。又蝗を實盛といふも原の稻別當といひを坂東の農民長井別當
の名をきより戯れに實盛と深語のやうなりひるが遂に諸国へことり
ちのゆきや。古の遊女の別當今も麿の別當も此俗語に近し守傳
の義ゆへゆえ難き類 昔の馬屋の別當
今も馬役の類

十三 太郎次郎

非情の物の魁あるを太郎とよむ。それふ次を次郎といふ事種とあり刀ふる郎
太刀次郎ち刀。盃ふ。ち郎貝次郎螺。利根川を坂東を郎と名づけりも
関東の大河るる。嵐雪か紀行 室永 二年 小曾根を郎とのり曾根

次郎をくるとある伊勢より紀州へ八鬼山越の坂の名とす。南都の大佛の鐘を奈良次郎といふ是より大なる海を船といふ鐘は遠江國の海の底に沈てありとい信ト難き説みならず彼地の人の常談なり。雲の峯と。江戸を坂東太郎。京にて丹波を郎曾根次郎。九州を比古を郎と云ふも其地の山川の大なるを雲の夕やふあせりなり。飛情の物を人名の如くひあをを原東一時の戯をあてさうてふ古きものこのやうゆかりをれ秘と爲憲學生の著 **口遊** 小「山を。近二。宇二。謂文大橋 今案小。山をい山崎橋。近二ハ勢多橋。宇二ハ宇治橋」とあり山をい山崎を郎の略。近江二郎宇治と郎といふなり。唯二ととかるものともらば。山一。とこそあるべし。山とあるを二二も郎の字の略を体事明るり此書天禄元年の作今より八百七十余年と大橋とを郎次郎といふ事とやくあり

此口遊の注に和長二年小書りのともをあれど山と云ふ事ハ如本文小あり拾芥抄の全公書のも小書うされしるべし

又近く

用捨箱 下廿一

倣諧の句あり此類の詞紙私小製しとむがきあり

隱蓑 延宝

雜萋 初雪の花の兄きや富士を郎 伊安

俄枕 延宝

雲や隙空小知れ思富士を郎 良景

田鳥集 元禄十三年印刻 三千風撰

余所の雪枕んであら富士を郎 能榮

前々附歌かゝり 元禄十三年刻 洲傍の堂ハ松の木かられ

涼船その雪をばよ富士を郎 作者不知 其角高點

茶の例小くは後河を郎と云ふべし彼倣諧詞小製し故すえより

たぬふうちひくめて富士を郎といひしるべし

廣澤やひこらまぐろ沼太郎 央邦

山の老郎ハ富士あり。川の老郎ハ利根あり。それ等ハ對して。あハ沼の老郎
るまとりひたて。余所ハ知れぬ時雨ハ孤ぬくと廣澤の廣き光景とひひる
あり。池老郎とりひこらまぐろ沼太郎と轉トころハ俳諧のまことらきるべし
本朝文鑑
小載る支考ガ酒盛の移文ハ武藏野織初るんと不皿の名と何代也。飯椀の老郎
に肝をけしとゆるいあまの狂トふる書言まらるる廣沢を沼の老郎と。椀を
不皿の老郎とするも其意ハ齊。是前ハ私ハ制衣する綱なり

此条ハ亡友曳尾庵の説ハ予ガ考へを添ふるなり又或人の説ハ近江國
の方言ハ鳳城沼太郎とひこられる事と。按るハ厩を沼太郎とひこ所も
ゆるべけれど京師の夕ハ他國の方言とまことらまぐろ沼太郎とまことら

用捨箱下廿二

此廣澤やのやハ古歌も例あるにハる流のや也。ハハかまゆる俳諧
あての事。白炭や焼ぬ昔の雪の枝とひやあて。白炭ハとひこ事なり。是も
廣沢ハひとりまぐろとひひるなり。此や。ハハかまゆる廣沢ハひとり
ふれハ厩の事あるるまぐろ熟阿ぢとひひるべし

【十四】天ガ紅 尼ガ輕粉

夕陽の暉赤雲城ハまが登ふとひハ天の紅なり。又一種。女僧の尼の字と書べき
あり。是ハ今絶ふる童話ゆりハ童謡ももうひしやうハおもなる今あるも其
童話と他とてハ昔一人の尼あり他所ハ隠し夫と持しガ何百時頬登ハかいつけて
粧ハ。彼隠し夫と持しを尼の父母ハ告るりの何り親ハさうして尼を叱責と
のハ程の事なりあるべし 餘用集大全 延宝八年印本 阿行「尼紅粉」注 倭俗呼赤色之
雲曰尼紅粉」とゆり尼の字と書しハ彼童話ハ混トくるの誤なり

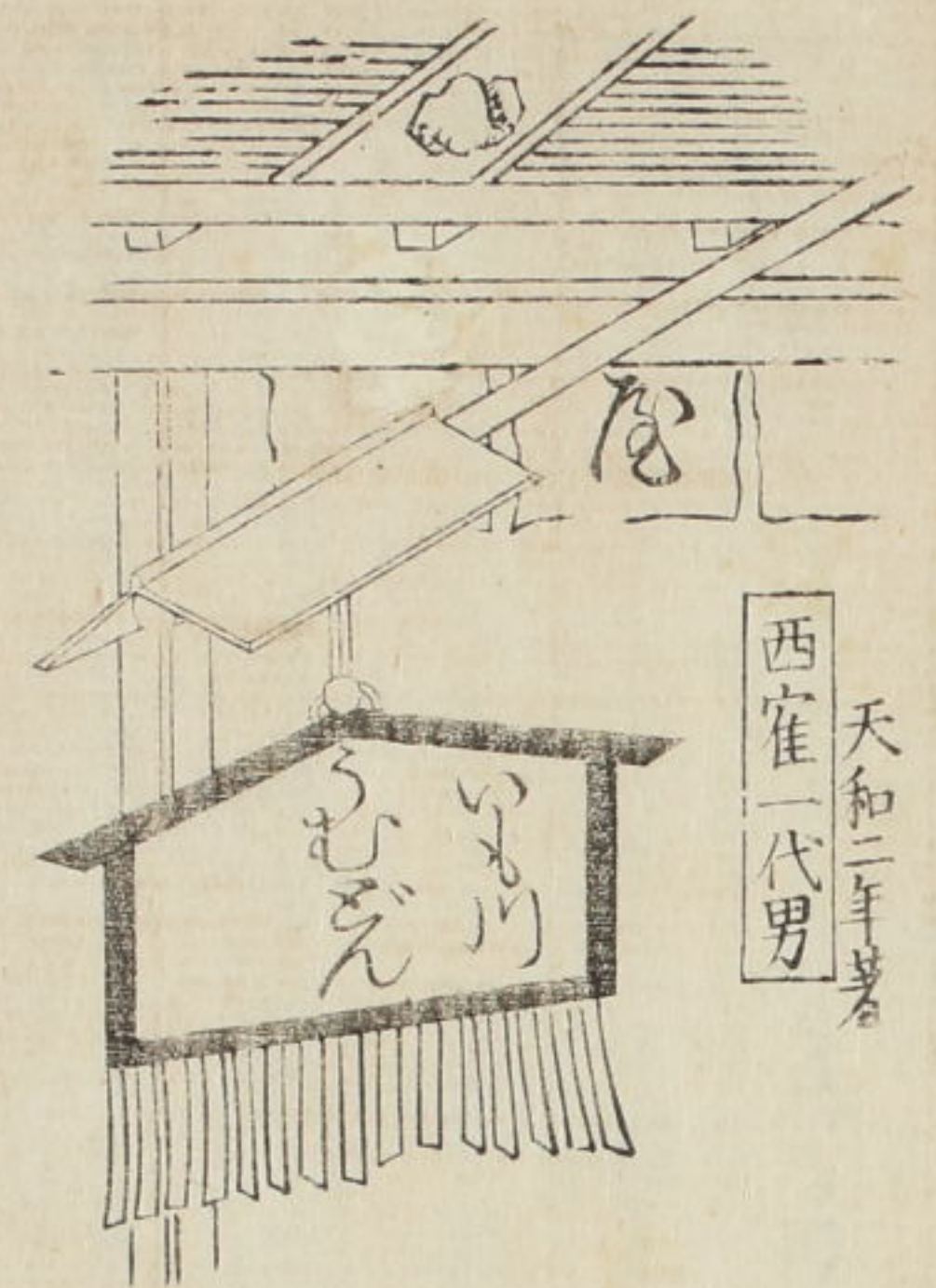
山ふりこ尼ガ紅さす 杉田雲 重仲

昔の例れいよりこ此句天の字をかくべし是のとるく近くのりて尼の字ふつられた。又京橋中橋あまんがふといハ江戸中橋ふか満ち荷とて紅粉を備へ願ごあまる社今ふ在。享保の頃奇特の事ありて糸猪群集ある刻の童謡るとも是も又天の紅混ト赤雲を見やり拍てうふ童今もあり

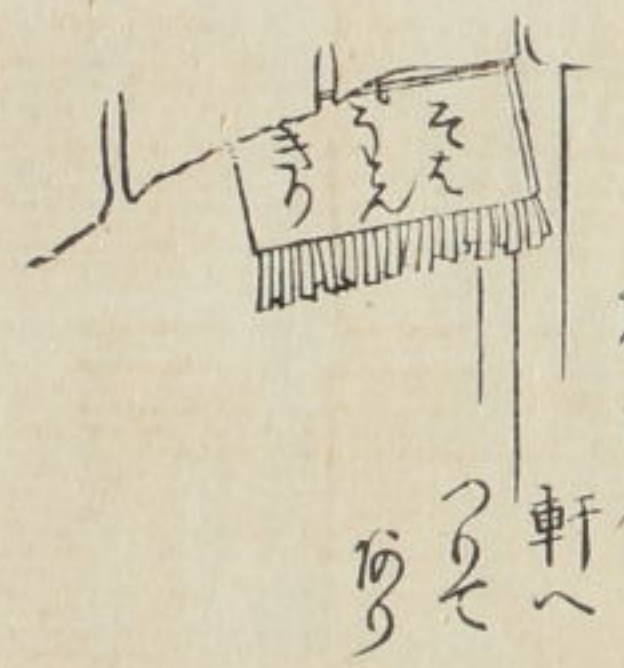
十五 温飩の看板 芋川

昔ハ温飩おこるたてて温飩のかさらうふ蕎麥きりを賣。今ハ蕎麥きりを盛ふるて其傍の温飩を賣。げん屋との寛文中よりあれども蕎麥きりを盛ふ近く享保の頃もも悉温飩屋を看板額あるハ櫛形ある板へ細くさりる紙とつけらるを出しか今江戸ハ絶えり。寛政の初まハ干温飩の看板ハ彼櫛形の飯ハ青き紙ハて縁をと成りらる。軒掛ハままくあり一張

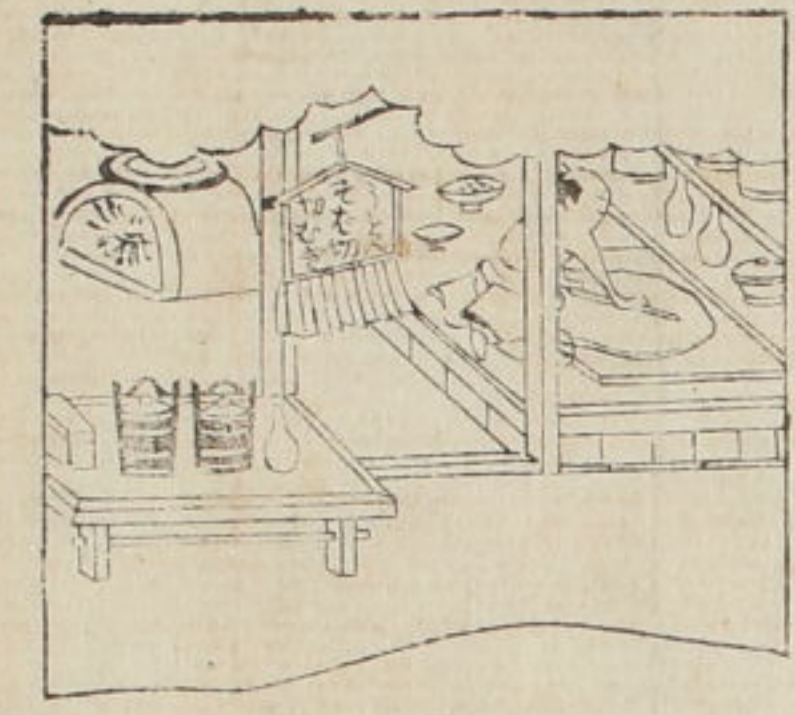
一冊拾遺 下廿四



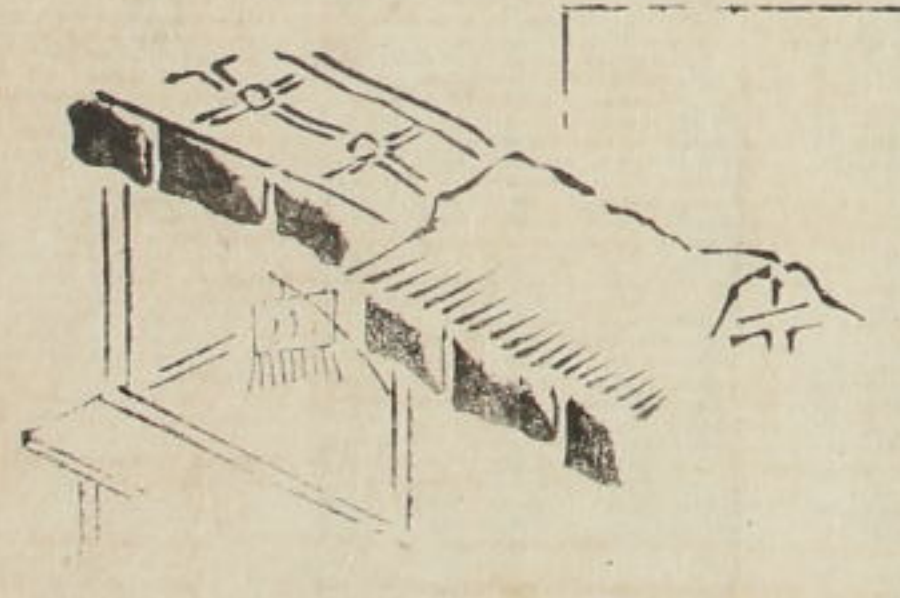
天和二年著 西雀一代男



人倫訓蒙圖彙 元禄三年刻 旅藝屋の軒へ



元禄十一年印本 道戯與小 勘板記カシ類ル 朝早アサ鏝花ハヤカク 鯉カウラ と記して上は摸しる 画あり



享保年間彫折本 江戸八景のうち 品川の飯帳は 此圖あり

桃の實 元禄六年

あうほひくう温飢屋の幣 撰者 元峯

吉原のつごもやどく茶髪 嵐雪

と何まば吉原の温飢屋もは看板の何りるべし又按るふ一代男二の巻小茶

摸く画紙載る條二川との所小猿寐して云云何りて一芋川との里小若松

昔の馴染何りて人の住何じする昔昔とつて所の名物ひく温飢を割てとの

事なえ。此冊子より新東海道名所記 万治元 四巻も池鯉鮒より鳴海まで云

の条小「伊と川。うんそを切り道中第一の鹽梅よき所なり」と何まば今平

温飢をひもかをとつひ芋川の誤るるべし其さまの似るるとを革紐とこと

富士石 延宝七

用捨箱 下九五

ひもかえ温飢捨水碎く氷のりか 調川

題ハ春氷なり。當時となくひもかえとりり。今も諸國の海道ハ彼幣めきたる

看板何りとを。又温飢の粉と移して慰がるやの形を偽るるべし。鏡餅の

勢あつる物を其ま載る看板田舎あひ何り

十六 大女房阿与米 附甫春

近年大女淀瀧ごうの沢見世物よ出く昔も彼似る女房を松會板年代記

天和三年新彫 延宝二年の条「江戸堺町は四ッふる子力持石臼小錢四貫文のせ持あぐ

十二月近江國より。くけ七尺三寸のる大女。名をおよめとの見世物よ出さ」と見え

又續無名抄 延宝八年 上巻小「近頃道頓堀小中略頭大甫春との有者あり顔

色常躰の如くうつらうさ人おとえり其く一尺二寸足脛をふれて細く四五歳

ふとえむ梅花心易を誦む粗書をよきて義小通む又大女房何り江州の者

あや白鬚大明神の變化なりとりひつるふ。ゆけ七尺二寸足のるがさ一尺二寸。
手のるがさ一尺。全身まがれて骨高く力人かこえ達者究竟の男中勝れり。
白の父事ゆり當時の俳諧小大女房とあるハ此おもゆ事なるを言ひ
あつたを世物小出。こきゆく文を高く見せんとて
足踏をたぐせとあやしく下駄足踏の句小附たり

延宝廿歌仙

古足踏猛火とるて燃ゆがや 嵐窓

大女房の大蛇いりり 全

西雀大矢教 延宝八

下駄の鼻緒や春雨の空

大女房一丈二尺 之門 霞

向之圖 延宝八

用捨箱 下共

大女房それき人ゆると富士の雪 如鐵

杉村治信の画本 古今男 天和四年印本の頭書小「近頃堺町かき見よまろりついで

小芝居の筋を通り小友のゆ。ふと保春とあよめとゆ大女房と競て見

とゆ。ゆ。ゆ。ゆ。腹をかへ事よ。まづ保春がせいの高さを一人一寸あやめが

大さ八尺 中略 天井よこぐ程小高く色白ければ藤子まごうの富士の如

保春ハ加僧也土人形の西行法師に似たり」とある也 續無名抄の如く彼二人

を及對ふり。梅小二代男 貞享四年の巻小「ある夜又道頓堀の火屋小一寸法師の

復書して居るを心をこめ目れば南春る」とあるを見れば南を保ま作じり

古今男の誤りるるべし。又。其角の著 吉原五十四君 貞享四年

梅かえ 櫻木 大女房あよめとゆ。ちんちんやんが妹小雀とや實よく似たり大廣袖の

中より這出ると世の人の笑ひ二本よき連づらちの道中無用なるべ。
 何れもこのごとくとのいひ。梅ぐえい身のしひひきく。様木とたけもさそ彼
 かよめ小比て誂しあや

十七 袖頭巾

袖頭巾一名所高祖頭巾との物さき草紙見え宝曆八年の写本
 愚痴拾遺物語「一兩年以前よりとりき頭巾なる袖頭巾との其原の」
 頼光との坊主品川へ通ふ高祖日蓮上人のかぶる物より思ひつぎより始り
 頼光頭巾とのひげるとり」と記し。又「我衣」宝曆元年大坂より中村富十郎
 との若女方下る室風を防ぐため紫縮緬を帽子とより人より時のあき女是を
 かぶりたる男もかぶる者あり其時の人は是を大明頭巾との」とあり袖頭巾とかぶ
 たる圖を載り。按ふ頼光。富十郎ふ起りとの兩説とも小承り宝曆元年

同繪箱下せ

より十八年承子保十九年印本 櫻鏡小

花盛にそれらあり袖頭巾

江戸町二丁目 平野平左内

とちのく

とありは草紙の吉原より浅草寺の境内へ様と植刻の遊女の夕集り
 此様と千本桜のいひ札櫻との奉納ある遊女の名札木毎小結てあり故り

繪本金龍山千本櫻

小載る圖

此さし小年号ハ
 見えざれども様流と
 同時る事ハ標題少
 明るりされば享保年間より
 此頭巾あり



画人ハ 奥村政信

此頭巾中頃の腮まで出るやう小結む目の下れよりふア程小製しより。由多不明和

八年 黛山點前々附うつふてあり」といふ「不さん其鼻を用る袖頭巾」と附

たるあり。又「我衣」記し如く昔ハ男もかぶりしや。風俗陀羅尼 宝曆十年小 尺童点集

「りつころふんやり男の袖頭巾」といふ有り **當世不同語** 明和元年 火抄高年印本
祖頭巾と見えたり

十八 追考二條

上卷 **九** 好事の追考 **著聞集** 飲食の事 **左京大夫顯輔卿の** 或人
法と成しておろしとせける小柄花をうるともあつたを僧ども あつたは
るると二品連歌おるんし侍りる 春の花え 脱て見せよか
證尊法印つけり さくらむむらるふりさうべき

とつを考る小卿の許小集にわる僧と喰せん料る故とせとておろしとを
と記しつる。そやく俗家小此綱うつてう。惜べし連歌お脱有り あつた 写誤もある
歎せえ羅し。去とハ則二度目の食。日の長き頃る侍事を極のかさしとあり
あて知る去の書建長六年著。前ふ引し **雜談集** の作者無住師の若き

雨拾箱下廿八

程小當了と時代よく合も。され上卷おひりし如く事始りの夜食始と
程の事あるべし

中卷 **八** 涙法師の条と再考る小今下賤の者少女と何生とりの發意
傍に對して尼といつるを梅るよはとも又古し

守武千句 天文九年

りつら法師のうかび出ます
まうらるも又まうらるも何ま小舟
うけがさきこそ人身と知是

前僧の事るを彼子法師よりるし。りつら男子の出生せん。まうらるも又
まうらるも女子なりと附するるべし。尼と海士といひけうかひ出るの録語小
小舟といひ流したる。少女と何まといふ俗言るければ句は又羅し

引りりいひりり事是のこわい何さされど見ぬふふつらなり
べと一糸ありて筆をさむ

浄書 谷金川

用捨箱下之巻 早



原書箱下之巻

和漢洋書籍發行所

發行者

藤井利八

東京市京橋區南傳馬町二丁目十八番地

東京市京橋區南傳馬町二丁目

松山堂書店

東京市神田區小川町十二番地

松英堂書店

東京市神田區小川町七番地

松陽堂書店

東京市神田區錦町壹丁目十番地

松山堂書店

發賣書肆

